

## 特別寄稿

## 山田十竹先生履歴書

畠 眞 實（元校長・高校7回・修道学園史研究会）



はじめに

この「山田十竹先生履歴書」は、A5版の大きさで、罫紙に手書きされ、紐で綴じたきわめて簡素な体裁である。修道中学校・修道高等学校の記念品室展示資料として長く保存されてきている。いつ、だれによって書かれたものなのかは不明である。この点、資料としての信憑性が問われるところであるが、先に紹介した、「十竹軒遺稿」に収められている、水山烈の「山田十竹翁小伝」の内容と重なるところも多く、しかも「小伝」に比べてより詳しい部分も見られる。いずれが時間的に早いものであるか、現在検証する術がないが、「山田十竹翁小伝」の記述を少しく補うものとして一読の価値はあろうかと判断し、これまで公にされていなかったので、この度紹介する次第である。

この「履歴書」は、漢字・仮名まじりの文語文で、異体字もかなり使われている。ある程度原文の感じを伝えようとして、いくつかは漢語表現をそのままにして注釈を施し、その他は読み易くするために口語に言い換えることとした。人物・事項についての注は最小限にしたため、あるいは充分に理解されない部分があることをお断りしておく。

なお、付け加えると、山田十竹先生の履歴に触れたもので、一番古いものは、明治三十四年八月二十八日の、先生の葬儀における修道校同窓会総代、稲田康太の甲辞であろう。（「修道学園史」に収録）、明治三十六年五月に書かれた、水山烈の「山田十竹翁小伝」は、この甲辞を参考にされたかも知れない。大正三年七月、先生の教え子有志によって二葉の里明星院境内に建立された頌徳碑（昭和三十八年に修道中学校・修道高等学校の校内に移設された。）の「十竹山田先生之碑文」は、修道中学校総理を務めた佐藤正の撰文である。こ

の碑文は「山田十竹翁小伝」を踏まえてのものであることは確かであろうと思われる。このほかに「修道学園の礎」の中に「開校の恩人 十竹山田養吉」（「修道学園史」に収録）という文章もある。

〔本文〕（本文の見出しは、口語文に直す際、便宜的につけたもの）

（国を思い、藩を思う）

山田養吉、父は三太。旧広島藩士、所謂御歩行組というものである。

養吉年十六歳、旧藩学校句読師となった。文久二年壬戌（1862）三人扶持が下賜され、学問所附を命じられた時に天下尊攘の議論がわき起こった。養吉が友と談ずるごとに、わが藩にしっかりとした人材がなく、財力もない、これからどのようにすればよいのであろうかと歯ぎしりして激しく憤り、悲憤の涙も流すのであった。養吉に従兄弟がいる。立野一郎といい、深く国事について憂いていた。その時江戸にいた。彼の友、安藤保之進、木原秀三郎らが藩命を受けて諸藩の間を行き来し、諸事を取りもっていた。これを「周旋御用掛り」という。養吉に弟がいて、片田春太（藩主を助け諸藩の間を奔走周旋する。国事を思うべしと書き残し、自死。）といった。旧藩主にお供して江戸に滞在していた。時に（立野）一郎等が国事について談じているのを聴き、感じるころがあった。しばしば書状を養吉の元に寄こし、江戸に上ってくることを勧め、国家が危急の状態を説き聞かせた。養吉はすぐにこのことを友人の船越八左衛門（後に洋之介、維新後に衛と改める。神機隊副隊長、千葉県令、石川県知事、宮城県知事を務める。）田口太郎（はじめ、学問所句読師。養吉と長州に赴き、七卿らを慰める。洋学所教授。藩命により欧州留学。）、川合三十郎、（後に鱗三。藩校の助教。神機隊の結成に参加。「藝藩志」・

「藝藩志拾遺」の編纂に従事。)星野文平(山田養吉と上記の三人へは京師へ行けとの藩命が下ったが、かれにはなかったため、加藤七郎兵衛宅で屠腹。後、伏見に至り深傷のため死去す。)の四人に相談し、お互いが言うには、わが公の志を尊攘に向けて決するようには、われら五人である。しかしながら、太平の世が二百年続き、藩の考えはその場しのぎの間に合わせでしかない。この事を役人に告げても取り上げて用いるところではない。(それゆえ)ただ脱藩あるのみだ。しかし、(それには)旅費がないのをどうしたものか。父兄の銭財は私すべきではない、と。五人の者は、みな手を拱こまねいている。三十郎が言葉をはさんで言うことに、この時に当たって細事は顧みるところではない。近々、我が家の禄が入ってくる。これを取って出発して、尾道に行き、知人のところにいって相談するだけだ、と。議論はついに決した。そして八左衛門の父は、事件に連座して、多年に亘って幽囚され、この頃新たにその苦しみから解放された。八左衛門はそこで養吉たちに相談して言うことには、昨日の脱藩のこと、固より甘んじて従うところであるけれども、藩の法は固陋(古いことに頑固に執着し、新しいものを嫌う。)であり、わたしが脱藩すれば、わたしの老父母を再び幽囚の憂き目に泣かせることになる、と。そこで議論は、また遮られた。すでに春太はまた書簡を養吉に寄こし、保之進もまた書簡を三十郎(保之進は三十郎兄)に寄せて言うことに、明春我が公は諸藩主と京師(みやこ)で会し、將に大いに議論しようとしておられる。しかし主君の側近には志士(藩のために命をかけて尽くそうとする者)がいないことを悲しむ。国家の安危(安泰か危機かということ)はこのたびの行動にある。諸君は宜しく藩から飛び出して、国のために働くべきである、と。五人はこの言葉をその通であると思ったけれど、ただひとつ、幽囚の一事を畏れる。そこで、養吉はすぐさまこれを小鷹狩介之丞に相談する。養吉の父の執とくであって、素より胆識(決断力・見識)があり(※とく読み取り不能)。常に国政の不振を憂いていた。養吉の言うことを聴き、深く感じて言うことに、旅銭はわたしがそのために都合をつけよう。幽囚について

は、あれこれ考える必要はない。そして、あなたはこのことを黒田益之丞に相談し、將にこれを執政辻将曹(江戸時代の老中の異称)君に相談するのがよからう。話は未だ終わらないうちに、養吉について来る者がいる。その者が姓名を述べて言う、「黒田益之丞」と。益之丞は豪胆で、心くじけることがない。素より国事を憂う。養吉の話聴き、これを将曹君に報告する。君(辻)の人となりは、議論を聞くことができ、風神(優れた容貌)は非凡である。仙風と号し、士(立派な男子)の出現を待望していた。確かに、君および黒田、小鷹狩の三人は、常に互いに会して、詩を作り、書を読み、音楽を楽しみ、且つ飲み、且つ談じ、藩政が振るわないことを慨嘆する年があった。諸藩に尊攘の士が立ち上がるのに、わが藝州藩は寂然(ひっそりとしたさま)として、そうしたことを聞くことがないと、互いに話して言うことに、藝州藩は、人材がいないうと嘆くことすでに久しい。しかるに、今、養吉たちのことを聞き、非常に喜ばしい。

文久三年(1863)春、将曹は將に京師に行き、宮中に参内しようとする。そこで養吉たちを一緒に行かせる。養吉は京師にあって、常に藩士の不振を憤り、しばしば藩主に謁見して説くところがあった。滞在半月、藩主は藩政府を一変したいという志をもった。養吉に藩政職を命じて言うには、養吉に一変させよう、と。養吉はそれで藩に帰り、藩職に入る。しかしながら、太平の通弊(共通して見られる弊害)で、格例(きまり・先例)が諸事を束縛し、案牘(取り調べを必要とする書類や書簡)が山積している。養吉はこの状況を一望(ざっと思いめぐらす)して一介の書生の任務に耐えうるものではないと悟り、辞退して学職に復帰した。養吉が常に思うことには、「人材あれば国即ち盛ん、人材無くんば、国即ち衰ふ。長(州)肥(前)薩(摩)学校の盛大、故に其の国、是の如し。養吉、器局狭隘(人としての度量が狭いこと)、奔走周旋(あちこち駆け回って仲をとりもって世話をすること)長ずるところにあらず。格例・案牘もまた知るところにあらず。且つ、養吉一人にして官事に当たらんよりは、人材を鑄造(育成)して千百人をして官事に当たらしむに如かず。養

吉はただ人材あるを知るのみ。」と。ここにおいて、大いに共に学事について議論し、初めて藩学中の生徒を寄宿させた。そのうえ藩政府が人材を登用することの宜しきを得たい思い、藩老浅野豊後に説明して、藩主に働きかけてもらい、将曹に政事に専任するようにさせた。この年、藩は養吉に切米（大名の家臣のうち、知行所を与えられていない者に対して春・夏・秋の三季に分割して支給される扶持米）拾石を賜り、学問所附を申しつけて言うことに、右（切米のこと）年来は無かったが、学事を心にとめ、学問所・寄宿寮をしっかりとまとめ、監督する等に厚く力を入れ、しだいに御趣意の通りに実行されたので、格別に御切米を下されたのである。

（養吉、長州へ）

元治元年（1864）長門の世子ならびに三条公（実美）その他七卿が京師を脱出して、長門へ落ち延び（いわゆる七卿落で、文久三年八月十八日の政変で、孝明天皇と中川宮が画策して、薩摩・会津藩が加わって京都から尊王攘夷派の長州藩とそれと結ぶ急進派公卿七人を追放した。また元治元年七月十九日には、長州藩と朝廷を固める会津藩・薩摩藩らの諸藩の間で起きた戦闘。禁門の変〈蛤御門の変とも〉が起こった。）、外国人が馬関（下関）を攻撃するに及び、藩は養吉と田口太郎の二人に長門に行かせ、三条公らを慰めるとともにその国の様子を窺うようにと命じた時に笠間の人、加藤有隣が長州に客人としていた。長州の命令を承けて藝州に使者としてやってきて、ちょうど長州に帰ろうとしていた。そこで養吉らに人を差し向け、長州に入るようにし向けた。八月五日、山口に到着し、賓館に至った。六日長州藩士岡儀右衛門、山県半蔵が館にやって来たので、これに応接する。大和国之介もまた陪席をしていて、京師より脱出して帰ってきた次第を弁解した。それが終わって（田口）太郎が先に（藝州に）帰った。有隣は養吉を伴って湯田に赴き、旭翠亭で饗宴に与るときに、馬関の戦いが正に酣で、大砲の音が殷々（大砲・鐘の重々しい音の形容）として亭の柱を震わし、行酒（お酌をしてまわる人）や小鬟（年少の給仕の女性）は顔面に人氣がない。有隣はついに養吉を伴い、三条公に謁見させた。公

が養吉に向かって言われるには、このたびの我らの挙動は時宜を得ることができず、ついにここまでやって来て、長州公を煩わせることになった。願うことは、善隣よしみの誼（以前からの親しい関係）を以て藝州公に宜しく取り成しを頼みたいということだ、と。（養吉が）ちょうど部屋から退出しようとする時、和歌をいただく。それは

玉の緒のまだ絶えやらで此の秋もながむべしとは志ら菊の花

（この命がまだ絶えることなく、この秋もまた眺めることができるとは思ってもみなかった白菊の花であることよ）

七日湯田を出発し、十日（藩に）帰る。

この頃、官軍に長州追討の命令があった。十一日、藩政府は養吉と田口生との二人に有隣に書状を送らせて、言うことには、馬関攘夷中は、追討の兵はともかくも遮るので、内顧ないこの患うれい（内向きの心配）なく、攘夷に尽力されるがよい、と。それ以来、有隣は広島にやって来て、しきりに善隣の誼を唱えて、養吉をつれて長州の大島に遊ばせた。九月一日、大島に至る。

ここは長州の国老某なにがしの領有するところで、その家臣明良篤之介、その子由太郎、書生青木駿等が代わる代わるやって来て、養吉のもとに控えていた。篤之介が有隣、養吉を誘って船遊びをし、魚を網で捕らえ、新鮮なものを料理する。僧銭念、青木生、土佐藩人小松生もまたともに遊ぶ。酒に酔っている内に有隣が長編の詩を作る。その中に、「豈忘醉裏片言真」（酒に酔ってのひと言にどうして真情がこもっていないことがあろうか。）の一句があった。思うに、酔語は真率（ありのままで飾らない）なる故に、その言を違えず、長州と親交を結ばせようと望んでいるのであろう。篤之介は、温厚、長者（徳が高く、穏やかな人）、学殖（学識）もまた深く、長州人が軽挙（軽々しく物事を行う）妄激（やたらとはげしいこと）、藩事を攪乱することを憂いており、養吉と深い交わりを結ぼうと願っていた。（九月）七日（広島へ）帰る。

（洋学生を率いて江戸へ）

慶応二年（1866）四月、藩命を受け、江戸藩邸学校を督察する。八月に至って長州再征の師いくさが起

こったので国に帰り、その後、再び十一月になって洋学生五十名を率いて江戸に遊学し、そしてまた学生を督察し、さらにまた自らも学び、或いは勿堂若山翁の塾に入り、或いは謹堂古賀翁の塾を督察する。翁たちはみな幕府の家臣である。この時率いた洋学生は渡征元、村上敬次郎、中村孟等もその中にいた。我が県に洋学が広まったのは、このことを以て始めとする。しかしながら、旧友たちは皆養吉を憎んで、言うことに、彼は洋学を始める。彼を見たならば、まずはその面をひっぱたいて、その後に諫めて誤りを正すほかない、と。

明治元年(1868)藩は高輪泉岳寺赤穂浪士四十七名の墓を修理した。養吉が碑文(表忠碑)を撰した。この頃は京師が騒擾として、官・幕の間に軍事が起ころうとしていた。それで古賀氏は塾生を置くことを辞退した。そこで、(古賀氏のもとを)去って藩邸に住まう時に京師八幡山の戦(慶応四年[1868]一月、いわゆる鳥羽・伏見の戦いにおける旧幕軍と薩摩軍とが戦い、旧幕軍は山崎・八幡・橋本へと落ち、守口を経て、大阪まで敗走した。)があった。

翌年(明治二年)人日(陰暦一月七日、五節句の一つ。ななくさ)に際して、養吉思うに、久しく謹堂師にお会いしていない。今日は人日である。行って、師にお会いしようと思い、お目にかかりたいと来意を告げる。門人が出てきて、わたしを引き入れる。師は椅子に腰をおろし、僧一名、門下生が二、三名いた。僧が去り、門下生が留まっていた。養吉は師に向きあって椅子に着いた。師は忽ち、連発銃を養吉に向けて撃つしぐさをし、言うことに、「おまえは藝州藩の間諜か。今日土佐・藝州人を撃殺しようと思う。」養吉が言うに「わたしは間諜ではありません。洋学生を督察し、自分は漢学を履修しようというだけです。」師が言うに「おまえの(仕える)藝州公は、幕府に叛いている。そうしておまえは悠々とこの地に留まっておき、今またやって来てわしに会っている。間諜でなくてなんだというのだ。そのうえ、おまえは京師八幡山戦争を知らないのか。おまえの国の兵が幕府の兵を破った。それなのにやって来てわし会っている、おまえが間諜でなくて、いったい

何なのか。」養吉は袒ぬぎになって言うに「撃殺しようと思われるのなら撃殺されよ。わたしは決して間諜ではありません。」と。言葉のやりとりがややしばらく続いた。師が言うことに「おまえが藝州公の思いを改めるように働きかけ、幕府に忠節を尽くすようにし向けるならば、赦そう。」養吉が言うに「このことは一介の書生が判断するところではありません。なぜなら、(わたしには)主君があり、父があり、一国の公論があるからです。しかしながら、三つの義(君の恩・師の恩・親の恩)があり、(その一つである)師の恩もまた重い。(わたしの)試みの成る、成らないは、予測はできないけれども、(国に)帰ってこのことを主君に必ず報告いたしましょう。」師が言うに「おまえがよく忠節を尽くすように働きかけをするなら、これをおまえに与えよう。」と。差し向けていた銃を養吉の前に抛った。養吉は(それを)受け取らず、言うには「これは望むところではありません。望むところは、御書です。」と。師の義子(義理の子)某が立ち上がって洞庵、謹堂二翁の書、二、三葉を取りだして養吉に贈った。思うに、師は学があり、識見があり、策略がある。それ故、まず養吉を恐喝し、また養吉をなだめ、藝州公の心を改めさせようとする。後になって、今回の事を思えば、その幕府に忠節を尽くす一介の書生の山田養吉をも利用して、忠節を尽くす幕藩を作ろうとする心は、銃を差し向けられた人よりも、差し向ける人の方が誠に悲しくあろうと思いやられるのであった。

#### (待賓説)

既に諸藩が江戸邸を撤退して、それぞれの国に退き、藝州邸もまた将に撤退しようとした。養吉はそれで国に帰ろうとした。江戸の医師蒲生重章(今は塾を開き諸生を教える)襲亭と号した。(その彼が)書状を送って言うには、立ち去らなければ、幕府は或いは土佐・藝州人を捕らえようとするかも知れぬ、と。そこで、退去して京師を通り過ぎる。船越、立野らが兵を率いて京都にいた。養吉が京都に留まって兵事に従事するやうにと望んだ。養吉は、そこで「待賓説」を作って言うことに、「大賓(大切なお客)有り。主人礼敬して、至るに備え(丁重におもてなしをしようとお客を

お迎えする準備をする)、帷帳しつらを設え、(幔幕を張り)、声楽を具し(音楽の準備をする)、盃盤雑錯す(盃が盛んに交わされる)。肴核うかくひんがん繽紛たり(ご馳走があちこち飛び舞うようである)。号して(大声をだして)其の子弟を召し、家人に曰く『賓事方に急なり。汝の常職を擲ちて、我が賓事を執れ。』(お客の接待が今まさにきわめて忙しい。おまえたちはいつもの仕事を放っておいて、わたしのお客の接待をせよ。)厨吏(料理人)これを聞き、亦其の刀を擲ちて(包丁を投げ出し)、盃盤の間を周旋し(酒席の場の取り持ちをし)、酒を行り(勧め)、肴を脩む。既にして盃盤傾く(酒がつきてしまった)。継ぐ(追加する)者無く、肴核(ご馳走)尽く。調する(料理する)者無し。主人愕然として厨吏を叱し、復(ま)た其の刀を執らしむるも、賓喜ばずして、既に去る。

方今、外軍旅(戦争)に従事して、内国の本を忘れる者、或いはこの者に類するところ有らん。(いま、藩は外部に向けては戦争に携わり、内においては国の根本[人材の育成]を忘れていいる。これは、或いは、今述べた話に類するのではないか。そのように思い)待賓説を為す。

ついに藩に帰り、幾度も人材無くば、盛んならずと上書して、漸く、城南廐の向かい、某の邸を以て書生塾と為して、句読師書生等を賄わせ、読書勉強の場所と為して、日々学校へは通勤する。元、学校中に句読師書生等を寄宿させたことに比較すれば、少しは盛んになった。

#### (小姓組に抜擢)

この歳、六月藩は養吉を抜擢して小姓組となし、切米貳拾石を下賜し、教授とした。

(明治)二年、黒田益之丞、高間多須衛等が志和八条原に学校を興し、講堂六十畳、寮数五十五、生徒二百余名を入塾させ、そのうえで操練を教えた。養吉に要請して教師とした。盛んと言うことができよう。しかしながら、国論が一致せず、翌年に至って(学校は)廃止された。右の校中で或る人に与えた書がある。それを以て「右校の記」に充てるがよい。これは別に記す。

#### (廃藩置県による騒擾)

(明治)四年、廃藩置県。浅野公(長勲)、東京に移住。公の夫人(松園)及び公の義父竹館公

(長訓)もまた八月四日を以て出発して東京に移ろうとする。しかし、民衆は竹館公を擁留(おさえとどめる)しようとして郡々の人心は動揺する。そこで竹館公は書状を県庁官吏に送って、郡民に告諭するようにと依頼する。県庁はそこで養吉及び佐藤守真、波多野八郎三人に命じて、将に因島に赴いて告諭させようとする。既に因島に至り、告諭する。翌朝、まだ布団にいた。里正が広島参事の書状を持って来た。書状に書いてあることは、「郡民が県城に集まり、説諭を聞いて去る者あり、去らない者がいる。竹館公の東徒(東京への旅立ち)は延引である。早く帰るがよい。」ということであった。そこで帰途につき、十三日、下瀬野里正理兵衛の家に着し、昼ご飯を食べ終わる。門外に人の声が喧しく、鐘声もまた股々と、人の振る舞い、ただその様子は、騒擾としている。養吉等は庭の松の根に登って門外の様子を窺ってみると、竹鎗を持っている者が十四、五名である。養吉が二人に言うには、「郡民がわたしに求めるところがあるか。」と。すぐに理兵衛がやって来て、跪ひざまずいて言うには、「村民はあなた方を太政官だと思っている。」と言う。その言葉がまだ終わらないうちに、竹槍また鎌等を持って勝手口の庭に詰めかけ、門外には三百人くらいも押し寄せた。養吉が二人に向かって言うことに、「我らがこのようなことに遭遇するのは、運の悪いことである。お互いに居り合って子細を説き聞かせ、それで聞き入れられないとならば自殺しよう。だから、竹槍では刺殺してくれるなど頼むことにしよう。逃げ隠れれば、尋ね出して、いかなる目に遭わないとも知れない。」と言うところへ、理兵衛がまたやって来て、「あなた方にお目に掛かりたい。」と申します、と言うので、養吉は二人に向かって、「くれぐれも三人の身は百姓に任せるのが宜しい。」と申しながら勝手口へ出たところ、上がり口まで詰め寄って、一人が鎌を振り上げて言う。「おまえたちは太政官であって、この下瀬野を焼きに来たということじゃ。」と。養吉が言うことに、「決してさような者ではさらさらなく、斯様、しかじかの次第である。」と言え、嘘をつくと鎌がまわるぞ。」と言う。養吉が首を延べて、「斬るなら、斬れ、決して太政官ではありは

しない。」と言ったところ、一人が側から鎌を持った者を抱き去ろうとするのを八郎が庭に下りて、「そこに置け。」と止めたけれども、ついに抱き去って言うことに、「彼は酔っております。」と。ここにおいて、この度入郡の理由を話し、竹館公の依頼の書面を読み聞かせたことで、心の中の疑いの固まりがすっかり解消したと思われ、群衆は漸く散っていった。養吉等は喜んで奥に入る。しばらくして、また前のように遅ればせの者が集まって来る。養吉等はまた前のごとく対応した。そして、また散会した。そこで急いで車を飛ばして帰る。

(明治)五年 広島新聞を始める。これは広島に新聞がつくられた始めである。

(海軍兵学校へ)

(明治)六年 また東京に遊び、七年 海軍兵学校十二等出仕に補せられ、皇漢学を教授し、その傍ら同校出版の「日本志略」を平仮名で編纂する。第一巻は、同校教授近藤真琴の筆になるものであって、以下は皆養吉が編纂した。

(明治)八年 十一等出仕に補せられ、十年 始めて「明治小学」を著述する。思うに、養吉は常に、洋学の道に入った時から、子弟の、攻心(心を鍛え、徳を磨くこと)の学が絶えるようなことを憂いた。そこで、和・漢・洋三国の先輩の言行を参伍(混ぜ合わせる)錯綜(たくさんのものが入り混じって集まる)して、書物を作り始め、十二年になって完成した。九鬼隆一(文部大輔)君が大いにこれを嗟賞(感嘆し褒め讃える)して、自らこれを諸県の県令に頒布した。二、三の県では、これを教科書として定めた。後に静岡県がこれを教科書としたいと要請するに及び、文部省が省令で言うことに、かの書は差し支えるところがある。用いてはならない、と。当時はどのような差し支えがあるのか、格別にこのことを究明しなかった。後に、このことに関して聞けば、同書に「耶蘇曰く」の文字があるということに拠る、と言うことであった。越えて、十三年十二月に出版された。亀谷省軒著述、「修身児訓」という書も、同じく、和・漢・洋三国の人の言行を参伍錯綜したものであって、その書には、「耶蘇曰く」という所は「西洋の諺に言うことに」とあって、これによって、「耶蘇」の文字が差し支えたとしたの

であった。

(明治)十三年 兵学校の官制が改まり、十一等に補せられる。八年の間奉職したけれども、身体健康であって、上校しない日は、三、四度である。

(浅野学校へ)

(明治)十四年 旧藩主浅野公(長勳)養吉に広島浅野学校を督察させた。養吉はこれを承諾している者に告げた。友人は驚いて、これを校長に報告し、また海軍卿にも報告した。そこで、養吉に海軍記録課を兼務させて言うことには、海軍史を編集させようとし、そのうえ養吉の思いを論して言うには、貴殿がもしも留まってくれるのであれば、准□任として、年俸九百六十円を支給しよう、と(※□読み取り不能)。養吉はそこで、友人に書状を送って言うには、「此の度の事、公の為、私の為取り計らい下され、萬謝仕り候。就いては、篤と思慮仕り候を得れども、鉄鑄の心腸挽回(思い返す)すべく無く存じ候に付、この上は御周旋下され、早く御放還之あり候様願ひ奉り候。

(大意 この度は浅野公のため、私のためにいろいろと配慮下さいまして、厚く感謝申し上げます。ついで、今回のことをじっくりと考えてみましたけれども、鉄のような固い決意を思い返すことはできないと存じます。このうえは、お取りなしくださって早く、わたくしが国に帰りますことお許しく下さいますようお願い申し上げます。)

詩一首 志を陳べ候なり。

男兒有志未為灰。一諾千金不可回。願得放鳥閑暇賜。郷鬻為国育人材。

(男兒志有りて未だ灰と為らず。一諾千金にして回らすべからず。願わくは放鳥閑暇を賜うを得て郷鬻、国の為に人材を育てん。(\*大意 わたくしは男子として人材育成という志をもっており、未だこの志を捨ててはおりません。したがって、浅野公の申し出を一旦承諾したうえはこの約束をどうしても変えるわけにはいきません。どうかわたくしにお暇を賜りください。郷里の学校において国のために立派な人材を育成したと思います。) 遂に広島に帰って、浅野校の生徒を訓導し、学校は「修道校」と名づけ、額字は浅野公の筆である。

(明治)十七年三月 生徒永尾司馬人を校費で東京に留学させた。六月になって司馬人は書状を送って言うには、「司法省が司法生を募っています。生徒を上京されて、試験に応じさせられるのがよいでしょう、と。養吉はこのことを承諾して、上京のことを密かに生徒に告げる。

#### (長男の水死)

そうして、七月二十一日養吉の長男得一郎がいわゆる御泉水裏で溺死した。この時養吉の邸は御泉水の境内にあった。学校・塾・共にみな御泉水の境内にあって、生徒は密かに水泳をしていたので、怪我があってはと思い、またその上、水泳をしてもよいように旧水主町の水泳教師二人を雇って水泳を修練しており、この年もいつものとおり、本日より水泳を始めようとする時にあっていた。その時、養吉は講堂で書籍の講義をしていた。そうしているうち、水泳教師があわてふためいて学校に帰ってきて報告して言うには、「誰であるかは分からないが、指導を受けないで泳いでいて水に溺れた者があります。」と。養吉が立ち上がって走りだしながら叫んで言うには、「よその子を死なせたのか。」と。水辺に辿(たど)りつく。ある者が言うには「得一郎君です。」と。養吉自身は、よその子でなくて少しは安堵したといえども、家には七十歳の老母がいる。妻はお産が数日のうちにあるやも知れないというところで、我が子の死の知らせを聞いて産気づき、ひよっとしたら気が狂ってはと心配をする。

どうしたものかと 思慮すること久しくして、意を決して長男の水死のことをまず母に告げた。老母は聞くとすぐに座を立てて神棚に祈る。そうしているうちに人々がせわしく走りやってくる。弔意を述べる者もある。養吉が思うには、もはやこのことを妻に言わずに伏せ通すことはできない、と。そこで表情を引き締め、自らを励ますように大きな声を出して、妻に向かって「今、一大事がある。このことを話して、おまえがひよっとしてかっとなって心を乱すようなことがあっては、山田養吉の面目にもかわり、そのくらの覚悟のないような者に浅野学校を任されるのは、任せる者も知れた者だと言われるようなことがあれば、浅野(長勲)公の面目にもかわるので、少しで

も心を取り乱すようなことがあったら、すぐさまにおまえを離縁するぞ。これらをよく心得て気持ちを鎮めて聞くのであれば、話をしよう。」と言ったところ、夫人は「承知いたしました。」と言う。ここに至ってやっと事の次第を詳しく話したのである。ところが長男の遺体を一晩中探し求めたが、見つからない。翌朝になって引き網にかかって御泉水の裏に引き上げ、裏づたいに自分の住まいに送ろうとするにつけて、穢れたたものが御泉水を通り過ぎるのはいけなしいとして、舟に乗せて三軒小屋のところへ引き上げて、そこからわが住まいへ送ってくれと申しつけた。

その後、五日ばかり経って、妻も無事出産し、ついに狂気を発することもなく、大いに安堵したのであった。

このような大事があったにもかかわらず、生徒を連れて上京されたのは、上京して、入校試験を受けるのに期限もあり、この期限に間に合わないようでは、養吉の職責に反するといいて、わが子の葬儀が終わると、すぐに生徒五、六名を連れて、八月十五日に出船して東京に赴いた。死んだわが子と同じ年頃の者、同じ教育を受けた生徒を伴って、特にわが子の死んだ日から僅か二十五、六日しか経っていないために、生徒の後ろ姿を見ては、しぜん人知れず涙を流し、東京に到着した生徒の万事を頼みたいということで、同郷の人三、四十人を金杉楼に招き、詳しく演説をしようと思ったが、ややもすれば嗚咽しそうになるため、遂に演説を止め、この生徒たちをよろしく頼むと言っただけであった。

そもそも溺死のあった始めから自分が思うことは、この時こそ男児が狼狽(うろた)えるべきではないと思ひ処置は致したのであるが、ただわが子の死を悼む涙には耐えきれない父子の情の割きがないことを知るべきである。

この度の生徒は帝国大学を卒業して、なるのは、判事或いは検事である。秦野健次(のちに判事となる。養吉の二女ハルと結婚。)、梶山延太郎、手島兵次郎、山香次郎吉(のちに大審院判事となる。)の四人もその内である。この年、養吉は広島斯文会講師であった。

#### (私学への道)

明治19年 浅野学校が廃止されたので、学校の残りの資金を支給して、生徒七、八名をサンフランシスコに留学させたいと浅野公に請願し、「修道校」の額と孔子の神位（これは藩祖賢君恭昭の筆になるもので「至聖先師孔子神位」とある。）とを譲り受け、独力で二度目の修道校を興し、洋学・漢学・算術その他普通の事を教える。

明治20年 諸生を激励のために文詩雑誌を発刊する。「燈火余適」と名づけた。

明治21年 このような田舎では教師を養成しなければ、学校は運営できないと思い、校費で平野久雄を東京に派遣して、算術を学ばせる。

明治22年 海軍兵学校予備科を創設する。

明治24年 山口高等中学校予備科を創設する。

明治25年 海軍兵学校機関生徒廿名募集の内へ、本校池田岩三郎、牧原雄吉、重村義一の三名及第。入学。

同年 陸軍士官学校生徒予備科を創設する。

明治26年 同志士を募り、一会を創め、「赤心会」と名づけ、士気を振起することを以て目的とする。

同年12月 生徒一名、海軍兵学校試験に合格。入学。

同年9月 生徒四名、山口高等中学に入学。

同年同月 生徒二名、陸軍幼年学校に入学。

明治27年9月 一名、幼年学校に入る。

同年同月 二名、山口高等中学校に入る。

明治28年9月 二名、海軍に入る。

明治29年9月 一名、海軍に入り、七名陸軍に入る。

明治30年 生徒三名、陸軍士官学校に入る。

同年8月26日 広島陸軍地方幼年学校教師嘱託。

明治31年8月 右辞職。

同年 生徒五名、陸軍士官学校へ。一名は海軍兵学校へ。一名は第一高等学校へ入る。

同年11月16日 広島県立広島中学校教師嘱託。

明治32年 生徒二名、海軍兵学校へ。一名は陸軍士官学校へ。一名は帝国大学に入る。

明治34年8月21日 広島県立広島中学校教師を辞職。

明治34年8月 従六位に叙せられる。特旨をもって位記を賜う。(宮内省)

明治34年8月26日 逝去。年六十有九。臥虎山(比治山)上に葬る。



## 校長就任ご挨拶

修道中学・高等学校校長 田原俊典

この度、2006年5月25日付けで校長に就任いたしました。同窓生の皆様方には、日頃より本校の教育にご支援いただきまことにありがとうございます。同窓生の皆様方が築かれてきた輝かしい伝統をさらに発展させていくために、「道を修めた有為な人材の育成」という建学の精神、また、それに基づく「知徳併進」という教学の目標の精神を、時代の趨勢を見据えながら今後の教育方針の

中に具現化していきたいと考えています。今年度は特に難関大学への進学実績を向上させるために、生徒の学習意欲をより向上させる具体的な教育活動を展開していくことを考えております。

修道が益々発展するよう尽力する所存でございます。どうか今後とも修道中学・高等学校の教育活動に対して、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。